



賛助会員・機関誌購読者のみなさま、および「3.11 からの出発」活動基金にご寄付くださったみなさまへ

2015.4.20.

「3.11 からの出発」活動のご報告 No.17

6年生を送る

小友小学校への訪問（2月23日）も13回目になりました。前回、先生方と話し合いをして、何かご要望があったらどうぞ、と申し上げておいたからでしょう。今回の訪問の前に、学校側からお話についての希望が出されました。いつもは2学年ずつ3組に分けているのを、今回は、1・2年生、3・4・5年生、6年生という分け方にして、1・2年生にはたのしい、おもしろいお話を、3・4・5年生には、リーダーになる子に贈るお話を、卒業を控えた6年生には、何かはなむけになるお話をというのです。

時間割の関係で、1・2年生のお話は、同行する金野さんと三野さんにお任せすることにして、わたしは、3・4・5年生と6年生を受けもつことにしました。リーダーになる子に贈るお話といわれて、まず思い浮かんだのがチベットの昔話「犬になった王子」でした。5年生は去年この話を聞いているのですが、新しい意味合いをもってもう一度聞くのもいいのではないかと考えて3・4・5年生にはこの話を選びました。これは男の子が主人公の話なので、女の子の話もほしいということになって、いささかこじつけかもしれないけれど、金野さんに「マメ子と魔物」を語ってもらうことにしました。

さて、6年生ですが、これが最後の機会だということで、思い切って「中国のフェアリー・テール」を語ることにしました。この話は、これまでおとなにしか語ったことがないので、冒険だとは思いましたが、小友小の子どもたちはとてもいい聞き手だから大丈夫と信じたのです。

絵を描きたいという思いに胸を焦がしている貧しい少年が、思いもよらぬある方法で、三百年前に世を去った偉大な画家の教えを受け、すぐれた画家に成長するまでを描くこの物語は、ふしぎな雰囲気を持ち、聞く人それぞれに深く受けとめることのできる象徴的な意味を含んでいます。長い話で、聞き手には集中力を要求しますが、子どもたちは、わたしが思った通りよく聞いてくれました。

15人のこの子どもたちのまっすぐな目を受けとめながら、わたしは、この子たちが主人公の少年と同じように、何か自分の人生でやりたいことを見つけてくれるように、また、学校でも、学校の外でも、心から尊敬でき、師と呼べる人に出会うことができるようにと願いました。さらには、本が、三百年、五百年前の人と近づき、その教えを受けることができる手立てであることを知り、本を通して広い世界への扉を開くことができるようにとも願いました。物語には、短いはなむけのことばでは到底いい尽くせない、数多くの祈りを託すことができます。わたしが伝えたいことを、わたしに代わって、色彩豊かに、美しく、しかも心の深みに届くよう、力強く語ってくれる物語があって幸いでした。

(松岡享子)

お話会プログラム

1・2年生

正月三日のもちつきは（わらべうた）
犬とねことうろこ玉（日本の昔話）
ブケッティーノと鬼（イタリアの昔話）
ひなどりとネコ（ピルマの昔話）
おいしいおかゆ（グリム昔話）

3・4・5年生

犬になった王子（チベット族の昔話）
マメ子と魔物（イランの昔話）

6年生

中国のフェアリー・テール
（L・ハウスマン作）



初めて陸前高田市を訪れ、会いたいと願っていた小友小学校の子どもたちに会えることになりました。そのうれしさの反面、被災地訪問だと思えば、厳粛な気持ちにならざるを得ません。この日は2月の岩手でも春のような暖かさでした。おだやかな朝日の下で、校庭に植えられた花が風にゆれていきます。子どもたちがここで日常生活を営んでいるのだという当たり前のことを思ったら、余分な肩の力がすっとぬけました。

小友小学校の子どもたちは、すばらしい聞き手です。わたしたちの担当した1・2年生は、大変なあいづち上手でもありました。まずはわらべうたの「正月三日のもちつきは」をしました。これで場が和んだと思いきや、お話となると、みんな姿勢を正して神妙な顔つきになってしまいました。けれども、楽しい話で空気がほぐれるにつれ、声をたてて笑ったり、話が終わると間髪いれずに「ああ、おもしろかった！」とさけんで次の話への弾みをつけてくれたりします。最後のお話「おいしいおかゆ」にいたっては、おかゆがあふれだす様子が語られるたびに、「えー」「ええー！」「えええー！！」と、合いの手を入れるように驚嘆の声をあげ、この短い話でよくぞここまでというほど楽しんでくれました。

外に出れば、震災の爪痕が深く残る景色に、まだ4年しか経っていないことと、苛酷な現実と闘い続けてきた4年という歳月の長さとを思いました。それでも、早春の朝、子どもたちの笑顔に接した後では明るい未来こそ信じて、自分にできる支援を続けようと心を新たにしました。（金野早希子）

小友小学校と「ちいさいおうち」への移動中、ずっと車窓の景色を見ていました。2月の末でしたが雪はあまりなく、盛り土の茶色い地面や、そこここにある工事のあとが、まだ生々しく見えました。夜、すこし宿の外に出てみたら、工事の赤い電気が遠くのほうでも光っていて、すべての工事が終わってあの電気が消えたとき、このあたりの景色はどんな風に変わっているのだろうとを馳せました。「ちいさいおうち」はあいにくお休みの日でしたが、司書の中井さんと荒木さんが鍵を開けてくださって、中も見学することができました。ほんとうにごく小さいスペースなのに、すみからすみまで見て一巡りするうちに、なんだか入ったときよりも広い空間のような気がしてくるのに驚きました。本のむこうにある広い世界の気配が感じられるからでしょうか。丁寧に並べられた本や、楽しげに読書に誘う展示。ここに来た人は誰でも、歓迎されているという雰囲気の中で本を手にとれるのだと思います。こういう場所が、いま被災地の子どもたちにどれくらいあるのでしょうか。

東日本大震災の後、神戸でお会いした東北の方が「神戸は震災の後でここまで復興した。うちのほうも、ぜったい元気になる」とおっしゃるのを聞いて、その復興のあゆみを見に行こうと思いつきながら、ずっと果たせずにいました。今回の旅をその第一歩として、今度はもう少し時間をかけて東北の地を歩いてみようと思います。（三野紗矢香 2014年度研修生）

3・11 ニュースレターは今号が最終号となります。

今後は「こどもとしゃかん」本誌に掲載しますので、そちらを引き続きお読みください。

公益財団法人 東京子ども図書館

〒165-0023 東京都中野区江原町1-19-10 Tel.03-3565-7711 Fax.03-3565-7712 URL <http://www.tcl.or.jp>

振込先 ゆうちょ銀行／郵便局 口座記号番号 00130-9-115393 加入者名 公益財団法人 東京子ども図書館
*報告のバックナンバーは、ホームページでもお読みいただけます。